

多摩デポ通信 第26号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2013年4月26日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・二一・一八

●HP / <http://www.tamadepo.org/>

●E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

総会に集い、

「多摩デポ」と

共同保存の明日を

語りましょう！

理事長 座間直壯

資料保存について、今さらではあります。が「最新図書館用語大辞典」(柏書房)を開いてみました。

「……(略)かつて資料保存という、利用と相対立する概念ととらえられる傾向があったが、今日では、『現在と未来の読者のために』『いつでも、誰にでも、いつまでも利用できるよう

にしておくこと』として理解されるようになった。すなわち、資料保存とは、図書館資料の利用を保障するための活動であり、蔵書の維持管理のための政策と計画をいう。(略)資料保存問題の取り組みは、(略)すべての図書館の固有の課題であると同時に、図書館全体に共通する課題として、図書館界、出版などの関連業界、研究者などの幅広い協力・共同が欠かせない」とあります。

図書館の使命が資料・情報の提供を保障することである以上、今と明日の利用者のために提供できる体制

多摩デポ年度総会に集まろう！

日時：5月19日(日) 午後2時～4時30分

会場：国分寺労政会館 第一会議室(地下1F)

国分寺駅南口5分 旧勤労福祉会館 電話：042-323-8515

午後2時～3時 2013年度通常総会

3時10分～4時30分 総会記念講演会

「国立国会図書館の新たな動きとデータベース活用」

講師：南亮一氏(国立国会図書館関西館・図書館協力課長)

場所を移して、午後5時から懇親会



を作っておくことが求められます。資料保存は図書館の重要な政策であり図書館計画の中心に据えねばならない大きなテーマなのです。

「多摩デポ」は、図書館資料の共同保存システムの構築を目指して活動を続け6年目を迎えることになりましたが、あらためて共同保存の意味や機能を深めていくことと同時に、図書館界はもとより関係する様々な機関や人々に理解と協力を求めていく努力を重ねていかねばならないことを痛感しています。今後もこれらの目標に向かって努力し、発展させていきたいと考えておりますので、会員の皆様のご支援・ご協力を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

今回の総会記念講演会は南亮一氏を関西からお招きし、国立国会図書館の資料のデジタル化の現状とこれ

からについてお話を伺います。デジタル化が進む中で資料保存はどのようなのか、地域の図書館の資料提供サービスのあり様はどのような対応が求められていくのか、大変興味のあるテーマです。図書館現場で働く多くの方々にも是非ご参加いただきたいと思えます。誘い合わせてのご来場をお待ちしています。

総会記念講演会の背景

国立国会図書館では一九六八年以前発行の蔵書はデジタル画像化を終え、館内閲覧を始めています。このうち絶版等の資料を全国の図書館に配信する事業が来年1月から始まります。

地域の図書館は登録館になれば古い蔵書が読めるようになるわけで、準備が問われる事態に。大きな変化が生じようとしています。

周辺住民向け 都立多摩図書館の移転 改築説明会開催される

3月27日(水)の夜に国分寺市立第四小学校で「東京都立多摩図書館移転改築計画説明会」が開かれました。案内チラシは敷地外延35メートルに配付され、住民20数名程が集まりました。

図面等の資料を元に、東京都地域教育支援部管理課長、都立多摩図書館長らが説明。新図書館は1階が開架や展示スペース等、2階が管理部門とセミナールームと閉架書庫、3階も閉架書庫です。地下は湧水を考慮し書庫にしないそうです。

住民からは「隣接歩行者道路やアクセス道路の整備」「隣接地の今後の計画」「日照の影響」「20〜50人規模のセミナールームがほ

しい」「雑誌最新号を電子版で多人数が同時に見られるようにしてほしい」「一角に市立図書館窓口を設置して返却や予約本受取を」などの質問・意見が出ました。

質疑は近隣の生活上の問題に関することが主で、都立図書館の保存機能についてのやり取りなどはありませんでした。近隣の「7割位の人は借りられる図書館ができる」と思っている「の」のようです。

実施設計後、もう一度住民説明会がある予定とのこと。市町村立図書館長協議会等に対しても新図書館の機能を中心に説明を行ない、意見の聴取をしてほしいものです。



第16回多摩デポ講座報告

2月16日(土)に「映画『40万冊の図書』の監督に聞く く疎開させ空襲から本を守った事跡を追う」と題した講座を八王子クリエイトホール視聴覚室で開きました。講師は昨年末に映画を発表された金高謙二氏。太平洋戦争末期の空襲下に、図書館蔵書に加え大量の民間買い上げ文献をも、多摩に疎開させ守る取り組みをした都立図書館の事跡を追ったドキュメンタリー映画の話です。ご用意されたスチール映像を映しながらのお話でした。

参加は23名でしたが、多彩な方から活発な発言が提供される場となりました。この事を発掘し、監督の取材にもアドバイスされた元都立図書館職員(長谷みどりさんⅡ下欄参照)や、かつて図書館の先輩と疎開に

使われた土蔵を見に行った経験を語る、隣市の前図書館長、映画公開を受けてのあきる野市内で調査の動きを紹介する地域新聞記者の方などです。

蔵書疎開を取り上げたノンフィクション児童書「学年別 ほんとうにあったお話 5年生」(「戦火をのがれた四十万冊」の題で収録)発行も教えられました。



長谷みどりさん発言

私は東京都教育委員会に事務職員として勤務し、退職間際に日比谷図書館管理課に異動になりました。

日比谷図書館は開館したのが明治41年(一九〇八年)ですから、平成10年(一九九八年)が九〇周年にあたります。その頃は昭和32年(一九五七年)に再建築された図書館の建物は老朽化しており、「廃館」ということが新聞にも大きく報道されるような状況でした。

改築の予算要求もしておりましたが、まずは日比谷図書館を利用してくださっている方に、日比谷図書館が今までどうであったのか知っていただきたいと、九〇周年記念の展示をすることにしました。

予算もないので、まさに手作りです。すべて自分たちでやることになったのです。

私は異動で図書館に来ただけなので、図書館のことはよく知りませんでした。幸い広報委員であるお二人の司書の方と三人で展示をすることにしました。

戦争で焼けてしまっているのが資料探しは大変でしたが、古い新聞などを探したり、今まで先輩たちが書き残してきた日記とか、佐藤政孝さんの『東京の近代図書館史』などを夢中で読みました。また、何か記録が残っているのではと思い、中央図書館の倉庫も探させてもらいました。棚の上の方にある茶色い段ボールの箱がなんとなく気になって開けてみたところ、古い文書が出てきたのです。昭和18年から25年までの文書をバラバラに綴ったものでした。昭和18年という戦時中ですから、焼けてしまっている残っていないと思われる文書です。

先ほどの監督のお話に出てきた疎開の時に手伝っていたいただいた一中生の名前がわかったのは、「労働がきついで、代用食を出してやって欲しい」という要請文書があったからです。「○日分出して欲しい」と名前と出席日数が書いてありました。

図書館員の数はこれだけ、出征中の職員は何人で残っているのは何人、そのうち女性は何人だとかいう淡々とした庶務的文書なのですけれども、淡々としているだけに、こんなにたくさんの方が戦地に行ってしまっているのかと実感できるものだったのです。埃にまみれた一頁一頁を開けると本当に涙が出てきます。

戦争が終わってからも、すぐに民主化しなくちゃならないわけですから、そういうことも出てきます。図書館というものが戦時中

から戦後にかけて、最後は図書館法が決まるまで、どんな動きをしていたかというところが非常に生々しく出てくるのです。これは放っておけないと思いました。

でも、特に大変だったのは疎開事業だったと思います。私は退職が迫っていましたが、私も、なんとか疎開だけでも聞き取っておきたいと思いました。さつき中田邦造館長の筆跡が映されましたが、あの筆跡の文書もありました。多摩の多西村だけでは間に合わないと思ったのか、群馬とか長野とかそういうところにもパーッと線を引いたメモも出てきました。本当に、「ああこんなに大変だったんだ……」という感じでした。

私は、疎開先のお蔵の方たちがどんな思いで受け止めてくださったのか、また、一中生たちがどんな気持ちでどんなふうにして、そんな

遠くまで運んでくださったのかも聞いて残しておきたかったのです。

疎開先については、契約資料が出てきたのでわかりました。最初は西多摩郡多西村というのがあったいどこにあるのかもわかりませんが、五日市憲法なんていうのがあるからあの辺かなと地図を広げたら、すぐに見つかりました。「多西村」とか「草花」とか、ちよっと珍しい地名ですね。

電話帳で探してお蔵の方たちと電話がつながった時は、本当に夢のようでした。向こうの方もとつても喜んでくださいました。お寺さんはまだご存命で、直接お話を伺うこともできましたし、他にもご存命の方々からお話を伺えました。

一中は現在の日比谷高校です。同窓会が非常にしっかりしているのを知ってびっくりしたので、割合早く連絡がとれ、最初は電話で六、七人の

方からお話を聞きました。映画にも出ていらつしやるおひとり、「五〇年も経って記憶違いがあるかもしれないから集まりましょう」と呼びかけてくださり、四人ほど日比谷図書館に来ていただいてみんなで話してくださいました。

映画ができましたから、お蔵の方たちや一中生にお電話してご協力頂いたことにお礼を申しあげました。柳田国男先生のお話をしてくださった方は映画には出ていらつしやいせんが、また柳田先生のことをいろいろ話してくださいました。映画に出てくる方も、映画に出た後お一人亡くなられましたし、お蔵の方でもその後ご病氣になられて、今はことばが話せない方もいらつしやいます。みなさんぎりぎりです。

今日は図書館関係の方もたくさんお出でだと思えますが、戦中から戦後にかけて、図書館というものがどんな

扱いを受けてきたか、是非あの文書もたよりに調べていただきたいと思います。

私も実は四年位前に倒れて、今やっとお話できるようにになりましたが、しばらくは言葉が出なかつたのです。監督さんから「中央図書館に来てください」と言われた時は身体が動きませんでした。震災のちょっと前に初めてお会いして、それから、九〇周年展示のために調べて手元にあつた資料を、監督さんにお送りしました。それがこんなふうにつながって、とても有り難く思っております。

最後に、映画とは別件ですが、この二月の終わりに講談社から『ほんとうにあつたお話 五年生』というのが出版されます。本当に偶然ですが、その中に西多摩新聞の記事と同じタイトル「戦火をのがれた四〇万冊」というお話が載ることになりました。こちらにも活用していただきたいと思ひます。

監督のお話を伺って

石垣和子

戦時中に日比谷図書館の資料が、あきる野市（多西村）に疎開した事実をおぼろしいお話ですが、金高謙二監督の講座を伺うまで知りませんでした

私は一九八〇年代に新採用で勤務しておりました都立秋川高校（全寮制）図書館で、図書館報別冊として写真集「秋川の寺社をめぐる」と「秋川の年中行事」を発行いたしました。

当時は、図書課長の先生に連れられ、「とにかく大きな蔵のある家が地元の旧家だから、年中行事を行っているに違いない」と、大きな蔵のある家を見つけては訪問していたように記憶しております。その中には、西多摩新聞の松本さんが取材されたお宅もあり、「図書

館の人が蔵を見に来たよ」と語られたことを思い出しました。

その当時は、図書館勤務の司書でありながら、年中行事のことに頭がいっぱいで気にもしませんでしたが、今思えば、そういうことだったのかと、時を超えて知ることになりました。

一九八〇年代は、戦前・戦中のことを語ることできる方が、まだまだ大勢ご健在で、「今をのがしたら昔のことが聞けなくなる」と、必死で聞き取り調査を行っておりました。その時に、日比谷図書館四〇万冊疎開の事実を知っていれば聞き取りできたのにと、悔やまれますが、史実というのは後になって分かるということとを、この講座に参加して、身をもって知りました。

生死に関係のない文化は優先順位の低いものと思っておりますが、後世に残

さなければならぬ本が疎開したということは、本当に感動いたします。この四〇万冊疎開の史実を多くの人に知っていただきたいと思ひました。

「図書館資料の

里親探し」は

参考図書が

大好評でした！

「図書館資料の里親探し事業」は、参考図書の出物が多かった一年でした。多くの図書館が里親になってくださいました。里子の本たち、書架に納まって新たな読み手と出会っていることとでしよう。

年度の前半は、除籍候補資料の横断検索等を行った結果を受けて申込みがあつた資料（シリーズ本や参考図書等基本図書など）の里

親探しを、前年度に継続して実施しました。

数年前はシリーズ本の欠本をお知らせしたら、すぐ話が成立したものでした。ところが昨年度からは、欠本でも補充を希望しないケースが出てきています。各図書館の書庫スペースの逼迫が深刻さを一層増していることがうかがわれます。たとえば、「シリーズ変貌する家族」や「岩波講座教育の方法」（岩波書店）は、補充を希望する館としない館がありました。

旧版の参考図書は、学校図書館から希望が寄せられたものがあります。里親成立にほっとしながらも、新版購入を阻害しないかと心配でもあります。

年度の後半は、通信第25号でお知らせした全集・参考図書の里親探しを行いました。被災地の図書館での活用の可能性を含めて、複

数の図書館から文学全集や参考図書で状態の良い本が多摩デポに託されたものです。しかし、現段階の状況では被災地図書館とのマッチングは難しいことから、まず多摩地域内での里親探しとなりました。基本的なものも多く、所蔵している館が殆どではないかと思われました。が、調査してみると何館かずつ、未所蔵館がみつかりました。そこで、欠本状況や所蔵状況などをお知らせして里親を募ったところ、新品同様の本だったこともあって、特に参考図書については殆どが交渉成立となりました。

全集は「紅葉全集」「久保田万太郎全集」「和辻哲郎全集」などが成立。「幸田露伴全集」など欠本のみ申込みがあったものも。「鏡花全集」（岩波書店一九四二年刊の八〇年代の刷）は売れ残っています。参考図書は「日

本史大事典」（平凡社）、「日本古典文学大辞典」（岩波書店）のような大物や、「有職故実大辞典」（吉川弘文館）、「漢字百科大事典」（明治書院）、「世界の服飾」（マール社）など日常のレファレンス調査に役立つ資料、このほか、「武蔵田園簿」（近藤出版社）、「江戸内湾塩業史の研究」（吉川弘文館）など地域資料関係図書もありました。



→好評だった本

←お届け票

〇〇市立図書館
△△△様
「図書館資料の里親探し」
お申し込み資料(62冊)在中
NPO 法人共同保存図書館・多摩

申込みが重なったものは抽選で里親館を決定させていただきました。一番人気は、7館が希望した「日本名詩集成」（学燈社）、次は5館が希望の「万葉集各句索引」（桜楓社）。いずれも学生さんの利用が多そうなお本ですね。当選した館からは、「このたびは資料のご提供ありがとうございます。抽選に当選し、よろこんでおります。」「希望した本がすべて頂けるので大変感謝しております。また、当市までお持ちいただけるとのことです。」「買ひ損ねてしまい、ずっと気にしていたものです。」とお礼のメッセージをいただきました。はずれてしまった館には申し訳なく思っています。

市町村の図書館は新年度も引き続き「里親探し」をご利用ください。

（事務局）

共同保存図書館について考えること

名古屋大学文系総務課

図書グループ(法)

罇部美香

私は、卒業論文として「日本における保存図書館の発達と課題」というテーマで研究を行った。ここでは、現在活動しているいくつかの保存図書館を訪問調査の対象とし、多摩デポはそのひとつであった。

さて、そもそも「共同保存図書館」という形態の保存図書館はどのようなものなのだろうか。『東京にデポジットライブラリーを多摩発、共同保存図書館基本構想』(注1)によれば、“設置主体を異にする複数の図書館が、それぞれ除籍した資料を共同で保管し、書誌・所蔵情報の管理と提供

を行い、物流システムを保証して、利用者の求めに応じて共同利用できるようにした資料保存センター”(注2)とされている。ここでは、「共同保存図書館」と「デポジットライブラリー」を同一のものと理解して説明を行っている。一般的な「保存図書館」と大きく異なる点は、“複数の図書館が”、“利用者の求めに応じて共同利用できる”という点である。しかし、現在の日本で活動している「共同保存図書館」は、「保存図書館」とも「デポジットライブラリー」とも異なる。私にとって「保存図書館」とは“保存機能を重視した図書館”であり、「デポジットライブラリー」とは、“複数の図書館が協力して、日常的にあまり使われない資料等を共同で保管・利用する図書館”なのである。

しかし、ここで取り上げ

ている「共同保存図書館」は、そのどちらにもびつたりと当てはまらない。先にも述べた通り、共同利用という概念を備えているために「保存図書館」とは違う。また、「デポジットライブラリー」とも、あくまで資料保存センターとしての役割を重視する点で異なっている。「共同保存図書館」というのは、例えて言えば「デポジットライブラリーの保存図書館」に近いのではないかとこの結論に私は達した。それは、保存図書館の必要性が叫ばれてきた当初、保存に重点を置いたものと認識されてきた保存図書館が、デポジットライブラリーに一步近づいた証である。

日本においては、「共同保存図書館」と呼べる図書館自体が少ない。その中で、多摩デポが異彩を放っている最大の理由は、その運営基盤がNPO法人に託され

ているということである。公共施設である図書館という場に多摩デポという民間団体が一步踏み込んだ形となっている。もちろん、その一步がなければ都立図書館の資料はひたすらに失われていくだけだったのだから、多摩デポの功績は重要である。ただ、多摩デポの誕生が二〇〇二年度当初に強行された『都立図書館あり方検討委員会報告』に対する抵抗に由来していることから、本来はその保存機能は公共図書館が行ってしかるべきだったはずである。

「共同保存図書館」の特徴として先に述べた“複数の図書館”という点からも、公共図書館がその役割を担うのが適任と言える。その良い実践例が滋賀県立図書館資料保存センターである。また、二〇一二年に全部改正された三重県立図書館資

料収集方針にも“県内市町図書館等の除籍資料については、保存図書館の役割という観点から、必要なものの受入を行なう。”(注3)と記されている。これは積極的に評価すべきである。

都道府県立図書館という市町村立図書館の支援を行う立場の公共図書館のひとつが、現在改めてこのように述べていることで、今後その風潮は広がっていく可能性が大いにある。私はそれが、公共図書館だけでなく図書館界全体に広がっていくよう切望している。先に、“公共図書館がしてしめるべき”と述べた保存機能も、図書館界全体が有しているのに越したことはないのである。

(注1)「東京にデジタルライブラリーを多摩発、共同保存図書館基本構想」多摩地域の図書館をむすび

育てる会・編著

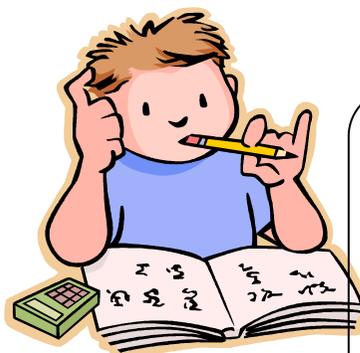
ポット出版 2003刊

(注2) 同書「第2章 東京にデジタルライブラリー(Deposit Library)を作る」26 P

(注3) 三重県立図書館“三重県立図書館資料収集方針”・三重県立図書館

<http://www.library.pref.mie.lg.jp/info/syusyuhousin.pdf> (参照 2013-03-27)

鱒部さんは、昨年、卒論を執筆中です、と問い合わせたところ、当時の、大学四年生、考えたことを書いていただきました。



♥♣ 表現の中の図書館 ♠♦

3月には古本屋を舞台にしたテレビドラマとヒロインの葉さん、が話題だったみたいですが以前に紹介した芳文社コミック……

「図書館の主(あるじ)」篠原ウミハル/作は4月には4巻目も出て、好評継続中。双葉社からは「夜明けの図書館」埜納タオ/作というコミックもあり。小説では「れんげ野原のまんなかで」森谷明子/作という、新米単身赴任女性司書を主人公にしたやさしいミステリを見つけました。楽しく読めます。東京創元社。

★会の現勢

2013年4月1日

現在

●会員

(個人会員103名)
(団体会員3団体)

●賛助会員

(個人44名)
(団体2団体)

会の活動はみなさまの会費・ご寄付で支えられています。新年度用の振込用紙を同封しました。よろしく願います。

●年会費

正会員(個人・団体)

五千元

賛助会員 1000円

(個人1000円 団体5000円以上)